



写真左：平和記念像の前にて（写真左から山口さん、中村さん、木村さん）
写真下：平和祈念式典会場にて



平和への思いを 新たに

Peace Forum

市では、平和事業として、子どもたちに平和の尊さを学んでもらうため、平成 16 年度から中学生を被爆地に派遣する事業を行っています。終戦 60 年目の今年は、8 月 8 日、9 日の 2 日間、長崎市において開催された「青少年ピースフォーラム」に中学生 3 人を派遣、原爆による被害の実態を、実際に自分たちの目で見て、肌で感じてもらうことにより、原爆の恐ろしさ、そして平和の大切さについて、多くを学んでもらうことができました。

市民まちづくり推進室 内線 362

平和とは「人の心の痛みが分かる世の中になること」

東中学校 3 年 山口 和輝

「せっかく生き残っても、人間らしい生き方も、人間らしい死に方さえもできなかった」

被爆された人の講話の中のこの言葉が、今も頭から離れません。原爆を受けたことや、家族を亡くしたことに対する悲しみから、自殺を思い人も少なくはなく、原爆は人の体にも、そして心にも大きな傷を与えること知った時、たくさんの犠牲を払って手にした「平和」の大切さを忘れてはいけなく強く感じました。

ピースフォーラムに参加して、平和とは「人の心の痛みが分かる世の中になること」だと学びました。それと同時に、戦争に対する悲しさも強く感じました。戦争という異常な状況の中では、人を殺すことが正当化され、多くの人が、かけがえのない人や物を奪われる。そんな戦争はもう二度と起こすべきではないと思いました。

戦争が世界からなくならなければいけない

西中学校 3 年 木村 伊央里

私が長崎に行ったのは、今回で三度目となります。が、今回の訪問が私にとって、一番大切な思い出になりました。

私が一番心に残ったことは、被爆者下平さんの講話を聞いた時の「私たちはお骨を踏みながら生活している」という話でした。原爆で亡くなられた人の拾いきれなかった骨をアメリカが調査に来た時に粉々にし、その上に土を盛り固めたのが、今の長崎なのだそうです。私はこれを聞いて「今の私たちが暮らす社会は、そういった犠牲の上に成り立っているのだ」と思いました。下平さんがおっしゃっていたように、もう二度と原爆が使われないように、そして戦争というものが世界からなくならなければいけないと思いました。

二日間を通して、貴重な体験がたくさんでき、本当にこれからの自分たちの生活を見詰める上でよい経験になりました。

自分から、日本から平和を広げていくべき

西中学校 3 年 中村 真理

私は今回のピースフォーラムを終えて、大きく二つのことを学びました。

一つ目は、原爆の恐ろしさです。原爆資料館や当時の地層を見学して、当時の悲惨さがよく分かり、被爆者の人の講話からは、家族の大切さがよく分かりました。そこから、私たちは今、家族・仲間を大切に生活していくべきだと思えました。

二つ目は、式典に参列させていただき、日本国憲法第九条の重みをよく考えさせられました。日本の平和はこれがあるからだと思えます。そして世界を平和にするために、自分から、日本から平和を広げていくべきだと思えました。

私自身、今回の経験を生かし、家族・仲間を大切に、今、自分がすべき事をしっかりと考え、どんな誘惑にも負けず、自分の行動に責任を持ち生活していきます。